

基調講演 1 木村 尚三郎氏

静岡文化芸術大学学長・東京大学名誉教授

<都市の魅力を考える上で大切なこと>

外国人は外国人向けの特別施設などではなく、その土地の暮らし、知恵などを楽しむ志向がある。たとえば、朝市が好まれるなど、その土地にしかない、良い生き方、街並み、建造物が都市の魅力となっている。

生活の活気が感じられる街は、パリ、ロンドン、ブリュッセル、ウィーンと評価されている。今日では、旅人も街の中を歩くようになっている。裏通りの魅力も高めることが、これからとても大切なことである。

21世紀は文化の時代であり徒歩の時代でもあり、歩きやすい街にすることが大切になる。女性は美しさ・心地良さを、老人は安心感を、外国人は分かりやすさをそれぞれ求めている。

<土地の美しさを創出する>

美しさは土地ごとに異なり、その土地なりの良い生活、良い色がでていくかどうかということである。たとえば、ビルの屋根を瓦屋根もするなど、街全体にデザインを統一することを考えていく必要がある。お寺のオレンジ色の光は安心感を与える。昔は我慢できたがこれからは我慢できなくなる。



また、美しさには食が欠かせない。都市ごとに郷土料理を作っていくこともこれからは大切である。海外で醤油とともに、日本食が伸びていく可能性がある。名古屋の新しい魅力として、食のレベルが上がったことも挙げることができる。

都市空間全体として見てみると、土地にあった文化政策がこれからは絶対に重要である。都市のローカルな魅力を考えると、文化は土地なりに引き出し方が違い、地域ごとの良い生き方を文化によって創出していくべきである。

万博は、6つの大きな文化圏にまとめられている。歩く楽しさが、万博の150年の歴史の中で初めて着目された。昔の回遊式庭園の現代版である。毎日がお祭りであり、先が見えない時代にはお互いが友となる工夫が、様々に考案されている。

< 安心して生きることができる都市空間を >

安心感ということも大切であり、大きな安心が生まれてくる枠組みが必要である。たとえば、人と自然、安心を安全にまで高めること、フランスの雑誌では、緑、土、水、空気など、自然と都市的なことが良いバランスを保っている都市が、バンクーバー、チューリッヒと挙げられている。これからは、住みやすく働きやすいなど、新しい街の基準が求められる。

自然と人間が愛し合って生きていくことも重要であり、森の中に街をつくり、森林セラピーのように病んだ心を健全にできる。環境は舞台装置のようなものであり、人間も含め一体となってお互いに生かし生かされている。歴史的なものを都市に再生することも重要である。このような考えで都市を再生して、生きる人の自信と誇りを支える「もと」をつくるべきである。

< 分かりやすい都市空間を >

人と人の関係については、ユニバーサルデザインを障害がある人でもない人でも誰にでも使いやすい社会システムとして普及していると、人間が人間を愛していることが分かる。

さらに、日本の街は分かりにくいので、行政の中の核となる居住地域は分かりやすくすること、助け合いの感覚を大切にするためにも集落の単位をはっきりさせること、案内・標識は子音を大きく母音を小さくなど、分かりやすくする工夫が大切である。



木村 尚三郎 Shosaburo Kimura

静岡文化芸術大学学長、東京大学名誉教授、2005年日本国際博覧会（愛・地球博）総合プロデューサー、財団法人トヨタ財団理事長

1930年東京都生まれ。53年東京大学文学部西洋史学科卒業。76年に東京大学教養学部教授に就任。97年から2年間にわたり、食料・農業・農村基本問題調査会会長（首相直属）を務めた。2000年に静岡文化芸術大学学長に就任し、現在に至る。

専攻は、ヨーロッパ史、現代文明論。主な著書に、西欧文明の原像（中央公論社）都市文明の研究（東京大学出版）など多数。